

第18回交流会 八幡平大会

とうほく街道会議

鹿角街道からアドベンチャーツーリズムを考える



『盛岡藩領内絵図』より（岩手県立図書館蔵）

開催日：令和5年 10月6日(金)・7日(土)

会場：新安比温泉静流閣 (八幡平市叭田 43-1)

報告書

＜主催＞とうほく街道会議第18回交流会 八幡平大会実行委員会

とうほく街道会議、八幡平歴史夢街道の会、七時雨口マンの会、いわて街道ネットワーク、(株)八幡平 DMO
NPO 法人東北みち会議、寺田地域振興協議会、荒屋地区振興協議会、五日市振興協議会、浅沢地域振興協議会
田山地域振興協議会、八幡平市文化財保護審議会、八幡平市観光協会、八幡平市商工会、八幡平市博物館友の会
八幡平市、岩手県県土整備部、岩手北部森林管理署、岩手河川国道事務所

＜広告協賛＞(有) サンヨー研究所、(株) 土木技研、河北印刷 (株)、MCC スポーツ (株)、(有) 岩手浄化槽管理センター、安比塗漆器工房

＜後援＞羽州街道交流会、あおもりかいどう会議、みやぎ街道交流会、ふくしまけん街道交流会、出羽の古道六十里越街道会議、
越後米沢街道・十三峠交流会、関山街道フォーラム協議会、NPO 法人全国街道交流会、(一社) 東北地域づくり協会、岩手日報社、
盛岡タイムス社、河北新報社、読売新聞盛岡支局、朝日新聞盛岡総局、毎日新聞盛岡支局、NHK盛岡放送局、IBC岩手放送、
テレビ岩手、めんこいテレビ、岩手朝日テレビ、エフエム岩手、ラヂオ・もりおか

開催趣旨

近世の鹿角街道には、いくつかルートがありますが、盛岡藩の城下町である盛岡から岩手郡、二戸郡、鹿角郡の土深井から秋田藩に入り、十二所、扇田などを経て、岩瀬（大館市）で羽州街道に至る街道でした。この街道の歴史は古く平安時代に出羽国の夷俘が蜂起した「元慶の乱」（878-879年）の時に、陸奥国からの鎮圧軍の通った「流霞道」（リュウカドウ）がこの街道の初出といわれます。また奥州藤原氏を支えた「奥大道」も岩手、二戸、鹿角地域を経て、外ヶ浜（陸奥湾西岸）に通じていたものと思われます。そして江戸時代に鹿角の尾去沢鉱山が藩営にされると、この街道は盛岡城下や大坂へ銅を運搬する重要な役割を果たしていました。

七時雨山麓からの鹿角街道には、一里塚や道標、旅人の供養碑など往時をしのばせる史跡が残っていることから、文化庁の「歴史の道百選」として、太平洋と日本海の分水嶺である梨ノ木峠から田山を経て湯瀬までが平成8年に選定され、令和元年には西根寺田から梨ノ木峠までが追加選定されました。

また「七時雨ロマンの会」と「八幡平歴史夢街道の会」が、街道の保全やマップ作成のほか、散策会も行っています。

一方、新たな観光の方向として、街道ツーリズムと街道周辺の自然・異文化に触れるアドベンチャーツーリズムの融合が期待されています。

この度、八幡平市内の歴史の道、鹿角街道とアドベンチャーツーリズムをテーマとして、とうほく街道会議交流会を開催し、地域の方々も含めて広く、この街道の魅力や取組みの内容などを知り、考えていただくとともに、東北各地の活動団体との交流により、取組みの更なる躍進を旨とするものです。

第1日目 10月6日（金）

会場：新安比温泉静流閣（八幡平市叭田 43-1）

交流会 第一部 「フォーラム」〔13:00～16:30〕 会場：コンベンションホール「あしろ」

オープニング

- | | | |
|--------|--|-------------------|
| ・主催者挨拶 | 八幡平大会実行委員会 委員長
とうほく街道会議 会長 | 小山田 和義
宮原 育子 |
| ・開催地挨拶 | 八幡平市長 | 佐々木 孝弘 様 |
| ・来賓挨拶 | 岩手県 県土整備部 道路建設課 総括課長
国土交通省 岩手河川国道事務所 所長 | 小野寺 淳 様
近藤 修 様 |

【基調講演】〔13:40～14:40〕

「奥州藤原氏から始まる八幡平地域の歴史と街道」

講師：八重樫 忠郎 氏（平泉世界遺産ガイドセンター センター長）

【分科会】〔パネルディスカッション〕〔15:00～16:30〕

「鹿角街道が繋ぐアドベンチャーツーリズムの可能性」

- ファシリテーター 柴田 亮 氏（㈱八幡平 DMO 取締役 CMO）
- アドバイザー 八重樫 忠郎 氏（平泉世界遺産ガイドセンター センター長）
- パネリスト 小山田 和義 氏（八幡平歴史夢街道の会 会長）
畠山 城司 氏（七時雨ロマンの会 事務局長）
階ケイティ 氏（㈱みちのりトラベル東北）
久保 竜太 氏（縦糸横糸合同会社）

活動紹介パネル展〔12:00～17:00〕 ※街道関係連携団体等のパネル展示

第2日目 10月7日（土）

探訪会

【A：七時雨一里塚～曲田一里塚コース】〔徒歩距離約8km〕

【B：白坂観音堂跡経由 留の沢一里塚～七時雨一里塚コース】〔徒歩距離約4km〕

【S：荒沢漆器の展示・講演】

主催者あいさつ（要旨）



実行委員長（八幡平歴史夢街道の会会長） 小山田 和義

本日は、市内はもとより、東北各地から多くの方々に参加いただきまして、とうほく街道会議第18回交流会八幡平大会が開催されますこと、誠にありがとうございます。

八幡平地域は古くから、鹿角街道を通して中央から日本海側・太平洋側へ、また中央へと人間の流れを繋いだジャンクションでした。

縄文時代の遺跡発掘で、この土地からアスファルトが出土いたしました。なぜ、ここにアスファルトなのかとっていました。ほかの縄文時代の遺跡からは、漆塗りで彩られました石刀が発掘されました。何故この時代に皮膚に触れるとかぶれる、あの漆があるのだろうかと思いました。

「だんぶり長者」のお話もございます。この長者の1人娘は京に上り、第26代の継体天皇（在位：507年-531年）のお妃（吉祥姫と呼ばれる）になりました。

この地域には孝順という僧もおられました。その方は修行され、徳川家菩提寺である上野の寛永寺の大僧正に招聘（1829年）されました。

最近では、八幡平市と隣の二戸市が一緒になり継承してきた漆文化が、「“奥南部”漆物語～安比川流域に受け継がれる漆の伝統技術～」として、2020年6月に「日本遺産」の認定を受けました。

このように、鹿角街道が通るこの地域には、誇れる歴史や偉人の足跡がたくさん残っています。

では、今回のテーマ、アドベンチャーツーリズムを私たちはどう考えていったら良いのでしょうか？

一部の関わっている人だけではなく、この地域全体を挙げて、道徳、文化、伝統を引き継ぎながら、これから継続できる地域づくりに携われれば良いのかなとっていますが、目標がまだまだ見当たりません。本日ご参会の皆様方の暖かいご指導をお願い致します。

最後になりましたが この大会を開催するにあたりまして、多大なご尽力をいただきました皆様方々に心から気持ちを込めて感謝を申し上げます。

“よくおどってくださりあんした。” 本当にありがとうございました。



とうほく街道会議会長 宮原 育子

とうほく街道会議は、平成16年の全国街道交流会議の上山市での開催をきっかけとして、平成17年に発足しました。とうほく街道会議では、東北各地の街道で、地元の歴史、文化、風土や自然豊かな景観など、多くの魅力を掘り起こし、美しい故郷を次世代に引き継いでくため、様々な活動を実施する個人や団体が交流・連携を図る場をつくる団体です。また、地域の自然、歴史・文化、食などを活用した街道のツーリズムや、地域コミュニティビジネスの支援を目指しています。

そして、とうほく街道会議では、この活動の一環として、毎年東北各地で交流会を開催しています。平成17年に秋田市を皮切りに、東北6県を持ち回りで開催しています。岩手県内は、平成19年に盛岡市で、平成25年に一関市で開催しており、今回の八幡平市で3回目となります。

なお、新型コロナウイルス感染症拡大の状況下の令和2年に第16回交流会と、令和3・4年に宮城県富谷市での街道歩きや市民のワークショップ、ガイドフォーラムを実施してきました。

今回第18回目となる八幡平市での交流会のテーマは、「鹿角街道からアドベンチャーツーリズムを考える」です。

基調講演では、奥州藤原氏時代の八幡平地域の歴史と街道が果たした役割などをご紹介します。また、分科会では、歴史ある鹿角街道が次の時代に向けた新たな魅力の創出の可能性として、アドベンチャーツーリズムについて意見交換をしていただきます。会場の皆さまも街道の可能性について考えていただければと思います。

そして、本日夕刻には「街道談義」として、とうほく街道会議名物の交流会も予定されています。また、明日は鹿角街道探訪会として2コースと地元開催の漆器イベントへの参加が企画されていますので、各地からお越しの街道関係の皆様と情報交換や交流を楽しんでいただければ幸いです。

開催地あいさつ（要旨）

八幡平市長 佐々木 孝弘 様



本日、東北各地から参加していただきました皆さんを心から歓迎申し上げます。

当市は、平成 17 年 9 月に 3 町村が合併し、八幡平市が誕生して、18 年が経過しました。米、野菜、リンドウの花き、林業、畜産業などの生産量が県内上位を占め、第一次産業が主体のまちであるとともに、秀峰岩手山、十和田八幡平国立公園の景勝地八幡平、一日に七回時雨れるという七時雨山、東北有数の規模を誇る安比高原スキー場など、県内随一の観光地として、観光産業も盛んなまちです。

私たちは、合併以来、旧 3 町村の特色を活かしたまちづくりを進めるとともに、それぞれの地域の良さを他の地域にも拡大していきながら、市の一体感の醸成に努めてまいりました。

一つのまちで、様々な食や文化伝統が楽しめることも大きな魅力の一つだと思います。

この会場の手前を流れる安比川の流域を、民俗学の祖である柳田国男先生が、その著書「豆の葉と太陽」の中で「奥南部」と称し、川とともにあるこの風景を讃えています。この流域で、古より漆の採取から漆器として完成するまでを生産してきたことから、「奥南部”漆物語”というストーリーで隣接する二戸市と八幡平市が令和 2 年に日本遺産に登録されました。

安比川流域には、鹿角街道のほかに八戸市から二戸市浄法寺を通って安代に至る浄法寺街道があり、これらの街道を通して、人、物、技術など様々なものが出入りし交流が生まれました。また、交易の場として市が開かれ、生漆や木地、漆器も含め売買がされたことから、漆採取から始まる一連の漆文化を、現代まで持続的に支えてきたと言われております。

さて、本日は、基調講演のほか、分科会では鹿角街道とアドベンチャーツーリズムの可能性について、新たな魅力づくりをテーマにパネルディスカッションが行われますが、当市の観光に新たな魅力が実現されることを期待したいと思います。

最後になりますが、多くの関係各位に心より感謝を申し上げますとともに、本日の八幡平大会が、皆様にとりまして有意義なものになりますようご祈念申し上げます。

来賓あいさつ（要旨）

岩手県県土整備部道路建設課総括課長 小野寺 淳 様



皆様には、本県の道路行政にご理解、ご協力を賜り厚くお礼を申し上げます。

さて、東日本大震災津波から 12 年余りが経過いたしました。未曾有の災害となった沿岸被災地では、これまでの復興の取り組みにより、復興道路等が全線開通したほか、防潮堤等の津波防災施設の整備が進むなど、計画されたハード事業の多くが完了いたしました。全国はじめ多くの皆様のご尽力に感謝を申し上げます。

この大会を通じて地域の皆様と東北各地の皆様方の交流が行われますことは、誠に意義深く、大きな成果が得られることをご期待申し上げます。

岩手県では、十和田八幡平、三陸復興の 2 つの国立公園や、平泉、御所野、橋野鉄鉱山の時代の異なる 3 つの世界遺産をはじめ、東日本大震災被災の経験や教訓を学ぶことができる遺構、雄大な自然とその成り立ちを実感できる三陸ジオパーク、豊かな食文化等の多彩な資源があります。ぜひこの機会に県内各地にも足をお運びいただければ幸いです。（代読：岩手土木センター所長 富岡治安 様）

国土交通省岩手河川国道事務所所長 近藤 修 様



皆様方には、平素より国土交通行政、また東北地方整備局所管事業の推進にあたり、ご支援とご協力を賜り厚くお礼を申し上げます。

先ほどお話もありましたが、3 つの世界遺産がある県は、奈良、鹿児島と岩手だけだそうです。また、私は普段盛岡市におり、たまにまち歩きを楽しんだりしますが、盛岡も歴史、文化豊かな土地で、まちの至る所に歴史的な建造物が残っています。そういったことから岩手というのは、本当に歴史と文化、あるいは伝統の豊かな土地であるかと常々で感じているところです。

こうした中で、この鹿角街道は平安時代にすでにあるということで、歴史のある道と改めて感じたところです。加えて、このルートの大部分は、今でも国道 282 号として地域の生活を支えており、そういった観点からもこの鹿角街道を今大会のテーマに取り上げるということは、まさに歴史、文化、風土を生かした地域づくりを考えるのに、打って付けのテーマではないかと考えています。

是非、活発な意見交換を通じて、八幡平市域内や東北各地との交流連携も促進され、地域の活性化に繋がることを期待しております。

【基調講演】「奥州藤原氏から始まる八幡平地域の歴史と街道」

奥州藤原氏の栄華により、北方～南方、太平洋～日本海の物資・文化の交流、それに伴う街道の発展。動乱を経ながら古代・中世・近世にかけての郷土の歴史を平泉文化から始まる歴史の観点から概説して頂きました。

講師 八重樫 忠郎 氏（平泉世界遺産ガイドランスセンター センター長）

はじめに

平泉は東西に長い町で、町内を国道4号のバイパスが南北に通っています。この国道4号の前身である街道は、平安時代には中心市街地の西側の山を通っていたことが発掘調査で分かっています。そして、その山の道は安代へと続いていました。なぜ、便利なところを通らないで山を通っていたかという事は後でご説明します。もう一つ、平泉には北上川が流れています。七時雨山に端を発して石巻まで全長240キロ以上の全国で5番目の大河です。

この国道4号の前身である街道と北上川があったということが、平泉が世界遺産になる大きな要因になっています。そして、その要因というのは八幡平市にも大きく関わっていたということをお話し出来ればと思っています。

浄土思想への険路と中尊寺建立供養願文

平泉が世界遺産になったことには、北東北で起きた前九年合戦と後三年合戦という出来事が大きく関わっています。この合戦によって、中尊寺の金色堂を作った清衡は、父の藤原経清と妻子を殺されました。その後、清衡は平泉を開くわけですが、清衡は戦争には勝ちましたが、戦争を起こした張本人であり、その戦争で自分と同じような戦争孤児をたくさん生み出してしまったのです。しかも大地は荒れ果て、人々は行き場のない怨念のようなものをもっています。清衡は、戦争の責任を一身に背負わざるを得なくなりました。このことがきっかけで、仏教に深く傾倒し、この世の中に生きとし生けるものすべてが平等な世の中を作ろうという、この浄土思想に思い至ったと考えられています。このような浄土思想というものはほとんどの宗教が持っていますが、平泉はこの浄土思想をまちづくりの中に具現化・表現したということが評価されて世界遺産になりました。

図1は『中尊寺建立供養願文』です。今も中尊寺に残っています。この供養願文は1126年に書かれ、中尊寺ができたときに読み上げられました。供養願文には、『敬白 建立供養し奉る鎮護国家大伽藍』、つまり国家を鎮護する大きなお寺を作りましたと書いてあります。これが中尊寺です。文中には、清衡が中尊寺を建立した経緯が記されています。これらが評価され、一連のものとして世界遺産になりました。しかし、世界遺産登録となったのは、お寺と宗教関係のみでした。つまり、平泉の宗

中尊寺建立供養願文(1126年)

「敬白 奉建立供養鎮護国家大伽藍一区事」

「…この鐘の響き渡るところあまねく平等に苦を抜き、樂を与える。

官軍でも夷賊もこれまで実に多くのものが死んでいる。

長かった戦乱の犠牲になった兵士たちをはじめ、鳥獣や虫類などに至るまでの霊を弔う必要がある。

靈魂は現世を去り、腐った骨は大地の塵になってしまった。

鐘の音が地をとどろかし、大地を動かすたびに、深い恨みを抱いている靈魂を清め、仏の国に導かねばならない。…」

図1 中尊寺建立供養願文

教的な部分だけが世界遺産になっています。非常に残念でしたが、現在は柳之御所遺跡など他の史跡の追加登録をするために準備を進めています。

金色堂と奥州藤原氏の栄華

金色堂は、当時の浄土の光景を表現したものです。金色堂がなぜピカピカかという、当時の理想郷である仏教でいうところの浄土とは、瑠璃色・金色の世界に金と銀で装飾された建物がたくさん並んでいて、綺麗な音とたくさんの光に満ち溢れた世界と考えられていました。金色堂はまさしく浄土の建物をこの世に造ったのだということがおわかりいただけます。お葬式の時に見かける祭壇が白木になっていますが、これも浄土の宮殿を表しています。生きている人が、死者に対して浄土に行つてほしいという思いを込めてこういうものを作ったのです。

1100年頃に平泉が開かれ、全盛期には当時日本国に入っていない北海道を除く青森県から九州までの3分の1を平泉が掌握し、東海北陸は源氏、関西を平氏が支配していました。1189年に、源頼朝によって攻め滅ぼされるまでの約90年が平泉時代です。

『吾妻鏡』は語る

鎌倉幕府の歴史書である『吾妻鏡』に書いてある記事によれば、中尊寺を創建するにあたり、奥州藤原氏初代清衡は、福島県白河関より青森県外浜（現在の青森湾）までの道に1町（約109m）毎に傘卒塔婆を立て、陸奥国の中心を測つて一基の塔を中尊寺に建立し、関路の道を開いて旅人の往還の道にしたと書かれています（文治5年9月17日条）。この記事を見ると、中尊寺が陸奥国の中心にあたるのが分かり、中心に位置することを計ることができる道が走っていたことも明らかです。さらに、清衡が関路の道を通すことができるようになりました。

同年9月28日条には、鎌倉への帰路についた源頼朝が平泉の達谷窟の由来を尋ねたことが記されています。すなわち、平泉の西の方にある達谷窟付近には、28万4千騎ともいわれる奥州藤原氏を滅ぼした鎌倉軍が通ることができ、さらに鎌倉へ通じる道があったこととなります。軍隊の数は、実際よりも多く記されている可能性はありますが、それでも3～4万騎の大軍であったと言われています。この白河の関から外浜まで縦貫して大軍が通ることができる道は、鎌倉時代の記録に出ている奥大道（おくのおおみち又はおくだいどう）としか考えられません。そして、文脈からみると、清衡が12世紀初頭に中尊寺を建立する以前から平泉周辺に奥大道がありました。これが国道4号の前身である街道、平安時代に使われていた山の中を通る道です。道というものは、都市の開発とともに付け替えられています。奥大道は江戸時代

には奥州道中、現在は国道4号と呼ばれており、ルートもかなり変化しています。

道とは何か

人が利用するだけならば道は必要ありません。では、道は何のために必要なのかということです。ある程度の広さがあり舗装した道は、荷駄や馬車などがすれ違うことができ走りやすい道です。平安時代にも石敷の道や砂利敷道などの舗装した道が、発掘調査で見つかっています。また、道の行く先には当然のごとく目的地があります。これらのことを踏まえると、道とは物資を運搬するために目的地をつなげるものだという事です。

今から1000年以上前、古代に設けられた五畿七道という7つの道がありました。東北地方には東山道が設けられました。それぞれ造られた道も最終的には、都に租税を運ぶために維持管理されています。つまり、道が作られた最初の目的は何かというと、税金を運ぶためだということです。

金色堂を建立した清衡の父である経清は、当時、宮城県多賀城にあった国府多賀城の役人に非常に恨まれており、前九年合戦で斬殺されています。なぜ恨まれていたかという、経清は元々多賀城の役人でしたが、裏切って東北の地元の豪族である安倍氏側につきました。彼は多賀城の役人だったので、多賀城が発給する税金を取るためのお札を持っていました。本来、お札には、多賀城から発給したことを証明する判子が押されます。経清は、お札は持っていましたが判子を持っていないため、戦争で資金に困った際に判子が押されていない札で税金を集めたのです。そのことを殺されるまで恨まれて、わざと切れないようにした鋸状の刀で首をゆっくり切られ斬殺されました。税金を集めるということは、国家の大きな既得権益です。それを勝手に行った経清への恨みは、殺され方をみても相当なものであったということが分かります。

道は、維持管理をしないとすぐに通れなくなってしまいます。現在の鹿角街道は、道としての様相は残していますが、維持管理はしていないために木が生えているところもあります。当時の道は、距離よりも安定した場所が選ばれました。道が安定した場所に造られたことは、発掘調査の結果から、全国でそのような傾向があることが指摘されています。

商人の誕生

平泉時代より50年くらい前の11世紀の中頃に書かれた『新猿楽記』の中に、八郎真人という人が出てきます。この八郎真人は、妻子や父母を顧みず、南は喜界島から北は外浜、現在という鹿児島島の端にある喜界島から青森県の陸奥湾まで、行ったり来たりして金儲けをする人だということが書かれています。金儲けをする人間が初めて出てきたということで、この人のことを商人と呼んでいます。このことから、この時期には道がだいぶ整備されてきたことが分かります。

金色堂から見える交流

金色堂の中を見ると、その装飾等にはグローバルな交易によって得た様々な材料が使われています。巻柱にみられる白い部分は、螺鈿（らでん）と呼ばれる夜光貝です。漆を塗った上に、金粉と銀粉を吹き付けて夜光貝を貼ります。この漆

は、縄文時代から地元で採れた漆で塗られているということが分かっています。しかし、夜光貝は奄美大島より南でしか採れません。もともとは屋久島より南で採れるためヤクガイと呼ばれていたようです。高欄と呼ばれる手すりの木は紫檀（したん）という東南アジアの木です。柱の角に埋め込まれている白いものは象牙です。これらを見ただけでも、南のものがたくさん来ているということが分かります。金色堂の天井にも螺鈿がたくさん使われています。金色堂は金箔で覆われていますが、この金は北上山地の金を中心に使われていることが分かっています。

これらのものがどのようなルートで運ばれて来たかという、象牙・夜光貝・中国から来た焼物などが一緒に海を渡り、沖縄本島から奄美大島の辺りを通って、博多で1回水揚げし、瀬戸内を通り抜けて太平洋を北上し、北上川河口の石巻で川船に乗り換えて、平泉まで運ばれてきたと考えられています。

平泉の道路の変遷

図2は開発される前の平泉の道路で、当時は山の中を通っていました（ACDEルート）。平泉の町が平安時代に造られる以前は、奥大道が山道を通っていました。平泉の町が開発されると、毛越寺脇にBという道ができます。すると、段々ここを通るようになり、町の中に道路が設置され、人々は町の中を通るようになりました。なぜ、最初から町の中の道路を作

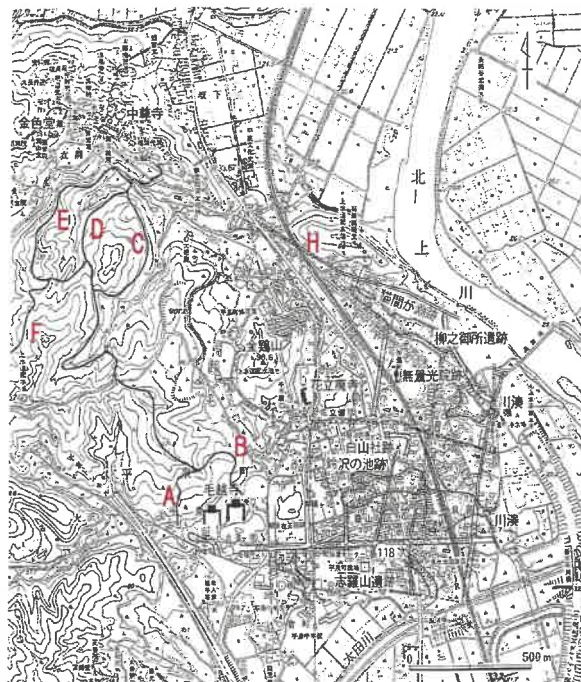


図2 平泉の古代道路

らなかつたのかというと、平泉の町の中は今も湿地帯が多く、簡単には通ることができないからです。それを当時の平泉の人々が工夫して、大きな道路を作り、道路側溝で水を排水していきます。そうすることで乾燥させて、道を通すことができるようになってきたことが発掘で分かっています。図3は、当時の平泉の様子を描いたものです。町の開発とともに道路が変遷していく様子が分かります。

推定奥大道

福島県の郡山市や白河市では、奥大道と推定される道路が

を一つに融合させる日本版のシルクロードの役割を担ったともいえます。すなわち、北東北の近代化に大きく寄与したのではないかということが言えるだろうと思います。しかし、土木技術の進歩によって、脆弱地盤を改良し、岩を砕いて道路を作ることが可能になりました。それに伴い、アップダウンが激しく、歩く距離が長い鹿角街道は徐々に廃れていくことになりました。

おわりに

平泉を世界遺産にするために、一番はじめに何をしたかという、平泉町民が自分たちの町を知るところから始めました。また、子どもの頃から平泉に親しみ、平泉を好きになってもらうことを目的として世界遺産塾を実施しています。活動内容は、木を植える、遺跡の発掘体験、実際に遺跡を歩く、子どもたちのシンポジウムなどです。この世界遺産塾は、平泉学という形で保育所・幼稚園から中学校まで実施しています。

こういう教育をしていくことが大事で、その根幹の礎になる、地域を好きになること、地域の歴史を知ることの大きなきっかけになるものが、八幡平市の場合はおそらく鹿角街道なのだと思います。まずは地域の皆さんが鹿角街道を知り、ここからいろんなものが生まれていったことをお子さんたちに伝えてもらえたらいいなと思います。そして、それを実現することができれば、郷土愛も生まれ、何よりもご先祖様たちの想いに応えることにもなるだろうと思っています。

鹿角街道のように一里塚や追分碑など、ロマンに満ちあふれる往時の面影をこれほど残しているというのは本当に珍しいと思います。この八幡平市をより豊かにするための一つのインフラ・地域の宝として、鹿角街道を活用していただければと思っています。

(※図は講演の画像・資料から抜粋・編集したものです。)

文化庁選定

「歴史の道百選」



古くから人、物、情報の交流の舞台となってきた道や水路等は、我が国の文化や歴史を理解する上で極めて重要な意味を持っています。

文化庁では、これらの歴史的・文化的に重要な由緒を有する古道・交通関係遺跡を「歴史の道」として、その保存と活用を広く国民に呼び掛け、顕彰するために、平成8年に全国各地の道78か所を「歴史の道百選」として選定しました。さらに、令和元年に新たに36か所（うち既選定への追加19区間）を選定し、「歴史の道百選」は114件となりました。

八幡平市では、平成8年に「鹿角・南部街道の梨ノ木峠」選定され、令和元年に「車之走峠越」が追加選定されました。

外に岩手県内では、生保内・雫石街道―国見峠越（雫石町）、久慈・野田街道（野田村・葛巻町・久慈市）、浜街道（田野畑村・大槌町・釜石市・大船渡市・陸前高田市）、仙北街道（奥州市）、陸奥上街道（一関市）、奥州街道―浪打峠・ヨノ坂越（一戸町・岩手町）が選定されています。なお、東北地方全域では、平成8年に16か所、令和元年には11か所（うち追加4区間含む）が選定されています。

(引用・参考:「文化庁HP」)

日本遺産

「奥南部」漆物語

安比川流域に受け継がれる

「伝統技術」

文化庁では、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として平成27年度から認定し、これを総合的に活用するとともに国内外へ発信することで、地域活性化を図る取組を支援しています。

令和3年度に「奥南部」漆物語（安比川流域に受け継がれる伝統技術）（八幡平市・二戸市）が認定されました。

日本民俗学の創始者・柳田國男は、著書のなかでこの流域を含む旧南部藩領北部を「奥南部」と称し、八幡平市から二戸市へと流れる安比川とともにある農の風景を讚えました。

ここで古くから受け継がれてきたのが、木から器をつくり、良質な漆を掻き、丈夫で美しい漆器を仕上げる技術です。安比川の上流域には木地師、中流域には塗師、下流域には漆掻き職人が多く住み、川沿いの集落ごとに分担して地域で一体的な漆器生産を行ってきました。

そして、今は文化として貴重な国産漆の生産を支え、漆器は安比塗、浄法寺塗として愛され、日本遺産として世界に誇る宝となっています。

(引用・参考:日本遺産ポータルサイト)

「奥南部」漆物語

●分科会：パネルディスカッション

「鹿角街道が繋ぐアドベンチャーツーリズムの可能性」

近年、アクティビティ（活動）を通じて、地域独自の豊かな自然・歴史文化に触れるアドベンチャーツーリズムの融合が期待されています。八幡平市の鹿角街道と歴史文化が繋ぐアドベンチャーツーリズムの可能性について考えました。

- ファシリテーター 柴田 亮 氏（㈱八幡平 DMO 取締役 CMO）
- アドバイザー 八重樫 忠郎 氏（平泉世界遺産ガイドセンター センター長）
- パネリスト 小山田 和義 氏（八幡平歴史夢街道の会 会長）
畠山 城司 氏（七時雨ロマンの会 事務局長）
階ケイティ 氏（㈱みちのりトラベル東北）
久保 竜太 氏（縦糸横糸合同会社）

はじめに

柴田 亮 氏（以下：柴田）：私は、5年前ぐらいから八幡平市の観光振興の仕事を始めている新参者ものですが、よろしくお願いいたします。

本日の分科会は、アドベンチャーツーリズムがテーマです。

◆「DMO」について

柴田 先ず、「DMO」について説明します。観光庁はインバウンド（訪日外国人旅行）で、地域を経済的に盛り上げていこうと考えています。

そのために、人気のある京都などに留まらず、他地域にも来て貰える様に、全国の県や市町村単位に「DMO」（デスティネーション（目的地）・マネージメント（総合的な管理）・オーガニゼーション（団体））という、地域の観光資源に精通し、地域と協同して観光地域づくりを行う法人の登録制度に取り組んでいます。

アドベンチャーツーリズム/アドベンチャートラベル

柴田 観光庁も注目する新しい旅行形態「アドベンチャーツーリズム/アドベンチャートラベル」について、説明します。

※この分科会では、「アドベンチャーツーリズム」と「アドベンチャートラベル」の用語が使われています。ほぼ同じ意味のため発言をそのまま使用しています。

◆アドベンチャーツーリズムの分野

柴田 アドベンチャーツーリズムに必要な分野は、図1のとおり

「自然とのふれ合い」、「肉体的な活動」、「文化活動」のうち二つの分野を満たしていれば、

アドベンチャーツーリズムといえます。

「アクティビティ」には、次の3つのタイプがあります。

①「ソフト」：トレッキング、ハイキング、カヌーなど。②「ハード」：結構危険を伴う様な登山、パラグライダー、スカイダイビングなど。③「専門」：バードウォッチング、教育旅行、異文化体験、ボランティア、ヨガなど自分の内面的な体験も組み合わせられているものです。

世界の市場規模は70兆円との予測もあり、大きな成長市場

なのは間違いありません。

これらの地域への経済効果は、クルーズ旅行者100人とアドベンチャーツーリズム旅行者4人が同じといわれており、少ない人数でも地域への貢献が大きいということです。

◆アドベンチャートラベルにおける5つの体験価値

柴田 また、「5つの体験価値」がいられています。

①「いままでにないユニークな体験」：他の場所では味わえない、ここに来る意味があるということが必要です。②「自己変革」（トランスフォーメーション）：自然やその地域の生き方などの哲学的な体験を通じて、自己が成長・変化していくことを感じる事が出来るという大事なキーワードです。③「健康であること」：運動や健康的な食事などで、旅行前より心身とも健康になった感覚を得ることが出来るのが大事です。④「挑戦」：積極的なアクティビティにより、身体的・心理的な様々な意味合いでの挑戦の要素が体験出来ることを求めています。⑤「ローインパクト」：体験にあたって、文化や自然に対しての影響を最低限に抑えて守っていくということです。海外の旅行者はサステナビリティ（持続可能性）への意識が高く、重要に考えています。

◆「オーセンティック」

柴田 もう一つ個人的に大事だと思うキーワードに「オーセンティック」（本物）があります。

外国の観光客は、おもてなしなどが行き過ぎたり、流行に合わせて作られた観光の為の体験ではなく、「本質的・素のまま・本物」などを見ていきたいという意識が強くなっていると感じます。

「アドベンチャーツーリズム・ワールドサミット」

柴田 先月、北海道で開催された「アドベンチャートラベル・ワールドサミット2023」（ATWS）にケイティさんも参加しましたので、紹介頂きたいと思います

階ケイティ氏（以下：ケイティ） 大会前に1週間ほどのツアーで、相馬から八戸までの「みちのく潮風トレイル」の一部を海外の方々と一緒に歩いてきました。

参加者は、アメリカ、カナダ、オーストラリア、マレーシアなどの旅行会社やメディアの方々でした。

もちろんトレイルを歩くのが軸ですが、船でカキ棚を見たり、カキを食べたり、洞門までカヤックで行くなど海からの景色も見たりしました。お寺や神社では、座禅などで日本のスピリットにも触れました。

相馬では、震災で中止していた浜焼きで皆さんと一緒に地元の魚を食べ、田野畑村では昔からの塩作り体験、洋野町では震



図1 アドベンチャーツーリズムの風景

災復興イベントにも参加しました。

地元の方々と触れ合っ
て、そこでの生活について
聞いたことによって、その
地域に深く関心を持ちトラ



図2 みちのく潮風トレイルでの食事の様子

ンスフォーメーション（自己改革）が出来ることもありました。

参加者から非常に注目されたのは、様々な宿泊施設と地域なら
ではの食事がすごく大事という話になりました。図2のとおり、
日本ならではの旅館で浴衣を着て、日本食を食べたことが
すごく好評でした。

柴田 東北の何が感動させたと思いますか？

ケイティ 今回は、3.11の復興というストーリーがあり、何で
そこに住むのか、どうい生活をしているかということに、皆さ
ん興味を持って話を聞いていました。

柴田 ATWSの本大会に東北代表として参加した様子を紹介し
てください。

ケイティ 約60国・地域から約800人の参加者でしたが、講
演会を聴いたり、小グループに分かれてワークショップしたり
で、すごく熱心な方々が多かったです。

講演会がない時は、ほとんどの方が東北を知らない感じだっ
たので、位置や魅力をPRすることが出来ました。

柴田 海外の旅行会社に東北の反応はどうでしたか。

ケイティ 熊野古道や中山道は、オーバーツーリズムになって
きていて、新しく歩ける道を探しに来ている旅行会社が多かつ
たです。「みちのく潮風トレイル」や「鹿角街道」は、これから
可能性はすごくあると思います。

鹿角街道の魅力

柴田 次は、畠山さんに鹿角街道を紹介頂きたいと思います。

畠山城司氏（以下：畠山）「七時雨口マンの会」は平成13年

に発足しました。当時、
私は会社勤めと街道を
保存する二刀流でした
が、今は農業をしながら
地域の歴史遺構の保存
に頑張ろうと思ってい
るところです。

図3は鹿角街道の
マップです。

寺田からの登り口に
白坂観音堂跡がありま
す。白坂観音堂の創建



図3 鹿角街道のマップ

は、西暦728年と伝わり、5年後に1300年になります。第
45代聖武天皇が勅使を派遣して創建し、秋には行基菩薩が開眼
したとの伝説があります。

鹿角街道は、「流霞道」（りゅうがどう）、「ながれしぐれみち」
ともいいますが、車之走り峠を越えると安代で、八幡平市合併
前までは二戸郡で、中世までは糠部（ぬかのぶ）郡でした。

紫波城と徳丹城から北には、七時雨山がすつくと立って見え
ますが、坂上田村麻呂は七時雨の境をどうしても越えることが
出来なかったといわれています。

図4のとおり、白樺を縫う様に鹿角街道が通っています。留

の沢一里塚は、現在も東側
と西側の2つとも残ってお
り、盛岡から約11里の一
里塚です。

そのすぐ近くに「追分碑」
があり、右かづの左不動江
の文字が彫られています。
不動とは、安代にある不動

の滝のことで、桜松神社が祭られ寺田方面からも多くの参拝者
が訪れました。

そして、一里塚を越えて行くと「助け小屋跡」があります。
ここは寺田と荒屋新町の境付近にあたり、風雪を凌いだり、荷
物の交換をした場所でした。藩政時代には尾去沢鉱山から銅も
運ばれました。

更に登るとマンダ（シナノキ）の巨木が両側にあります。そ
こを越えて最後の急坂を登ると、「塞の（さえの）神」があり
ます。小石を積んだ塚が11基あります。何のために築かれた
かは伝わっていませんが、外から入ってくる疫病や邪霊から村
人を守り、道行く人の安全も守るため積んだかもしれません。

最後の車之走り峠は、標高が700mあり、鹿角街道で一番の
難所といわれたところでした。そこから南西を見る岩手山が見渡
せる非常に景観の良い場所です。（個々の写真は14頁参照）

柴田 寺田は、糠部への最後の場所で、蝦夷（えみし）と呼ば
れた人々の文化が色濃く残っていたところへ越えるのがこの道
だったということですね。

畠山 歴史の大事な時に鹿角街道が現れてきます。平安時代に
秋田城が周辺の蝦夷に襲われた「元慶の乱」の時、坂上好
蔭（田村麻呂のひ孫）が陸奥国から越えたところでした。また、
奥州藤原の泰衡が逃れて行き、そして比内郡贅柵（現大館市）
で殺され頼朝へ首を届けるため通ったところでした。戊辰戦争時
には、盛岡藩首席家老の「榎山佐渡」が秋田藩に攻めて大館を
越えたが敗戦となり、榎山が泣き泣き帰った道でもあります。
歴史的にもこの街道が注目されて良いと思います。

柴田 私もこうした歴史を思いながら自然のままの鹿角街道を
歩きました。外国人がよく知っている京都などの表側の日本の
歴史ではない、蝦夷や縄文の世界へタイムトラベルしているよ
うな感覚になりました。

七時雨を越えた安代

柴田 畠山さんに紹介頂いた街道を越えていった先の安代地区
について、文化庁認定の日本遺産「奥南部漆物語～安比川流域
に受け継がれる伝統技術～」の紹介ビデオの一部を皆さんご覧
頂きたいと思います。

（YouTube動画を冒頭の約3分上映 ※動画省略、次のUR
Lで参照）

https://www.youtube.com/watch?v=axMxX1_8ADU

柴田 この地域は、かつて大豆畑が広がり、漆掻き、木地から
漆器まで一体的に生産されていました。今も季節それぞれの郷
土食があり、それを彩る漆器がある地域です。

この地域を代表して、小山田和義さんに神楽の取組みも含め
て紹介を頂きたいと思います。

小山田和義氏（以下：小山田）

（YouTube動画：「浅沢神楽まつり2017：浅沢神楽権現舞」

を上映しながら ※動画省略、次の URL で参照)

<https://www.youtube.com/watch?v=VJM4cMZCD8M>

図5は浅沢神楽の権現舞です。800年前に伝わったとも、450年前ともいわれておりますが、はつきりは分かりません。

演目としては、今のところ9演目でやっておりますが、若い人がだんだん少なくなり、非常に難しい状況です。



図5 浅沢神楽

この映像で舞っている人はほぼ30代です。神

楽には踊手、太鼓や手平鉦(てびらがね)を叩く人、それから笛を吹く人、歌う人がいます。歌う人は2人います。笛を吹く人は今1人ですが、30代前半の人が習っています。太鼓を叩く人は、男の人から女の人に変わっています。

柴田 ケイティさん。漆とか神楽、あるいは郷土食は、結構繋がりがあって、若い方々も頑張っている様ですが、旅行会社の方々はどの様に感じますか。

ケイティ 「みちのく潮風トレイル」の時も神楽の体験もしました。この様な文化は海外にないので、すごく興味を持ち、実際に踊ったりしていたので、この様な要素も取り入れることは、その地域の歴史・文化や生活がより見えてくると思います。

柴田 小山田さん。アドベンチャートラベルに来られた外国の皆さんにも神楽を見て頂く可能性はあるでしょうか。

小山田 この前、台湾からのお客さんが来られて、是非、神楽を見たいということでしたが、これは非常に難しい事でした。

指定された日は平日のため、舞っている人達はそれぞれ仕事を持っています。人数が揃って舞うということが出来ません。

この時は夏休中で子供神楽が出来ました。いつもどおり神事から始めました。言葉は通じませんでしたが、台湾の人達の中に子供がおり、子供同士で手まねなどで通じるものがあり良かったと思っています。(通訳の人にもお世話になりました)

旅行会社の人達とは、こういう感じでどうかなどの話になる訳ですが、マッチングするのはなかなか難しいところだと感じていました。事前に話し合いをすることが必要だと思っています。

柴田 ここはポイントで、後ほど取り上げたいと思います。

「岩手ラストフロンティア」プロジェクトの取り組み

柴田 地域の文化、素材を編集して、どの様なストーリーで見せていくかといったことを久保さんは専門的に取り組みをされていますので、紹介頂きたいと思います。

久保竜太氏 (以下:久保) 私の故郷は釜石市で、3.11大震災をきっかけに2015年釜石市にUターンをしました。

それまでは地元で全く興味がなく、この岩手で生まれたことすらも誇りを持っていない人間でしたが、その考え方、生き方が変わったのが大震災です。

先祖が代々暮らしていた家やお墓が津波で跡形も無くなり、それがすごく悲しく悔しく、先祖が生きてきた証を残せないかなと思い、家系図を作りました。

その作業の中で、釜石、岩手がどういうところか、どの様な歴史なのか、すごく関心を持って向き合う中で、ここは世界に誇れる土地、可能性があるところじゃないかと思うところに

まで至りました。

それを何とか形にしていくところに、人生をかけてみたいと思って、今生きていくところです。

この様な大きな原動力で取り組んでいる「岩手ラストフロンティア」プロジェクトを紹介します。

このプロジェクトは、岩手を外国の旅行者に対して、どの様にプロモーションをしていくかというところから始まったもので、柴田さんやケイティさん、遠野など岩手県各地のメンバーが集まって2020年に立ち上げました。

地域をプロモーションして行くには、そもそも地元の人が誇りを持っているということ。それを確信して見せられないと意味がないと思っています。

このプロジェクトでは、岩手がどの様なところかを、広くかつ深い視点で見つめ直して行くことになりました。

また、地域だけの狭い視点になるのではなく、世界の人達にどの様に魅力的に見えるのだろうかといった点は、ケイティさんの視点からサポートして頂きました。

ここで、2020年に私たちが作った岩手のプロモーションの動画「Iwate, the Last Frontier」(岩手のラストフロンティア)を観て頂きたいと思います。

(YouTube動画を約3分上映。※動画省略、次のURLで参照)
https://www.youtube.com/watch?v=X_p8jluVhho

このタイトル「Iwate, the Last Frontier」は、大きな考え方のキーワードになっています。

◆コンセプトストーリー

すごく大事にしているのが、ブレない大きなストーリーを持つということで、3つのコンセプトストーリーを持っています。

①「BURIDE PAST ~いにしえの大地に葬られた暁の民族の叙事詩~」。②「LIVING SPIRIT ~静かな人々のこころに宿る黎明の火~」。③「NORTHERN WILDS ~それらを生み出した、この大地の生態系~」です。

このストーリーで、いろいろな取組みを展開しています。

その一つが、自らが地域を知ることから始まるだろうという強い思いからフィールドワークを開催していますが、結果的にツアーの様にもなっています。参加者の半分が岩手県民ですが、半分が関東圏からすごく関心を持って参加する方が多い結果となっています。

例えば、図6の「エミシ、縄文とアイヌのはざま」“忘れられた民族と語られぬ歴史を紐解く”といったタイトルのフィールドワークですが、完全に岩手県向けにやっているつもりが、関東圏からリピーターになって参加が増えています。

他のフィールドワークは、獅子踊りをテーマにしながら、遠野物語の猟師のエピソードを絡めて、岩手の地で今も続く、祈りの芸能とは何なのか、といったところを拾っていくというものでした。

また、ブナのテーマでは、それらを生み出す生態系がどんなもので



図6 フィールドワークの例

あるかというところを、東日本を代表するブナを中心とした生態系をテーマしたフィールドワークもやっています。

こういったフィールドワークに参加した方々がどのような感想を持つかというところが、アドベンチャートラベルのポイントにもなるかもしれないので紹介します。

「私たちが未来に強く生き抜いていくための編集点が見つかるかもしれないと思った」、「日本人の美意識のルーツを感じた」、「視点を反転させたら全然違った景色が見えた」、「郷土、宗教、伝統、暮らし etc、時代によって複雑に積層してきた何とも言い様のない感覚を身体的に受け取ることができた」など、「自己変容」につづる様なポジティブな感想が多いです。

◆鹿角街道のアドベンチャーツーリズムの可能性

柴田 鹿角街道の可能性はどうか。

久保 可能性は大変に高いと思います。ダイナミズムなストーリーを持った中で、物語が現れてくるところを歩くと、より深い没入感を持って、この街道を歩くことが出来ると思います。

ここだけというよりは、もっと広い視点でストーリーを描いて、ルートを作り、ここを通ることが必然になるという様な組み方が大事だと思います。

私達のコンセプトストーリー「BURIDE PAST」のエミシなどをテーマとしたフィールドワークで、ここを歩かせて頂きたいと思っています。

柴田 ケイティさんは、鹿角街道の可能性として、仕組みをどの様に作って行くと良い提案はありますか。

ケイティ 久保さんが言ったとおり、ただ歩くだけではなく、もっと広い範囲のストーリーが出来ると良い。更にこの地域ならではの食物を取り入れて、食べながら行くとか。

また、漆の文化など、色々なところに触れながら、数日間のツアーに取込むとすごく可能性があります。

柴田 次に、小山田さんがご指摘された、ツアーを受け入れる難しさがあります。

旅行会社に振り回され、地元の方が疲れる様な状況は「ローインパクト」を大切にアドベンチャートラベルの旅行会社の本意ではありません。

そのため、いかに地元が気持ちよく受け入れができるかを丁寧に作っていくことについてアドベンチャートラベルの旅行会社は意識しています。

インバウンド客も持続可能な在り方を求めているし、そこに価値があるものにはその対価を払うという人たちが増えています。

ここがアドベンチャートラベルの肝だと思っていますが、久保さんはいかがですか。

久保 今、観光の可能性が大きく変わってきています。それは政策や消費者・旅行者の意識のレベルもそうです。

その様な中で、その間に入る事業者の考え方もこれから変わるし、様々なガイドラインなどが出来上がって来ることにより、これからより良い方向に行く気がします。

具体的にいうと、持続可能なサステナブル・ツーリズムで、分かり易くいうと3つの事がいわれています。

①環境的に適正であるという事。②その上で地域コミュニティに配慮して迷惑をかけない・悪影響を与えないという事。③かつ何か貢献するものがあるという事です。

これらの条件を満たした上で、経済的に成長することが持続可能な観光だという様になって来ています。

その様な考えを地域側でもいち早く取り入れながら、まずはDMOなどの中間支援に入る組織が、事業者の旅行会社と地域の間に入って、しっかりとその関係から浸透させて行くことが大事だと思います。

一つ例をいうと、私達の工夫は、郷土芸能をそのためにやってもらわない。普段の練習合わせてツアーを組むという様なやり方が、今のところ一番ご迷惑をかけないと思っています。

柴田 神楽や漆文化、食文化に蝦夷や縄文の自然観を見出すような見方ができれば、鹿角街道のストーリーに深みができます。蝦夷や縄文の世界には日本文化を理解する上で重要な自然観の本質があると思います。

さいごに

柴田 最後に、これまで街道や地域文化を大切に今に伝えてきたお二人にご意見等をお伺いで出来ればと思います。

島山 地元で企画をする人間が高齢化して出来なくなっており、若い世代に自然の大事さや地元の歴史を知ってもらうことが、一番のポイントだと思っていますので、後継者を育てていくことも大事だと思っています。

小山田 目の前が幾らか開けてきましたが、これで地元に戻ると“う～ん”といわれるかもしれません。

郷土料理については、頑張っている人がいますから、講習会等で若い世代にも繋げていけば、明るい未来が見えてくるかなと思っています。多くの人達の関りをお願いします。

柴田 この地域では他にも多くの若い人が頑張っています。それぞれの地区の伝統文化・風土、思いとかを若い世代の皆さんが繋げて行きながら、うまく発展して行くことに可能性が感じられます。

また、そういうものを求めている人々が全世界にいるということが、今日のシンポジウムからのメッセージかなと思います。

◆アドバイザーから

柴田 最後に八重樫さんに平泉の経験からのアドバイスをお願いします。

八重樫忠郎氏 お聞きしていて一番大切なのは、やはり郷土に対する誇り、自信を持つことだなと思います。

20年ほど前、平泉の世界遺産登録の活動を始めた頃、全員が半信半疑でした。

スタート時、私が担当の東京の方々を対象にした民泊モニターツアーは、稲刈り体験をして、農家へ泊って貰うという内容でした。感想文に夕食に刺身を食べたことが非常に残念だを書いてありました。宿の人に聞いたら、恥ずかしくて食べさせるものがないから刺身を買って来たということでした。

今日聞いて、やはり同じ様なところで皆さん自信がないのです。

実は、この地域が持っている財産はすごいものがありますから、そこに自信を持てる様に取り組んで頂ければ、動いて行くのではないかと思います。

柴田 これでパネルディスカッションを終了させて頂きたいと思います。ありがとうございました。

(※図は分科会の画像から抜粋・編集したものです。)

プロフィール

基調講演講師 / 分科会アドバイザー



やねくらし ただゆし
八重樫 忠郎 氏

◆平泉世界遺産ガイダンスセンター センター長

岩手県出身。1985年駒澤大学文学部歴史学科卒業。2016年東北大学大学院文学研究科修了。博士（文学）。

1985年平泉町教育委員会文化財センター。2002年平泉町世界遺産推進室室長補佐。平泉町まちづくり推進課長、平泉町観光商工課長を経て、2023年岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンターセンター長（現在に至る）。他に岩手大学平泉文化研究センター客員教授。

著書『中世のみちと物流』共著 山川出版社1999、『北のつわものもの都 平泉』新泉社2015、『平泉の考古学』高志書院2019ほか。

分科会：ファシリテーター



しばた りょう
柴田 亮 氏

◆(株)八幡平 DMO 取締役 CMO

東京都出身。都銀、シンクタンクを経て、(株)経営共創基盤にて、後にみちのりホールディングスとなるバスの事業再生事業に参加。東日本大震災後はグループの岩手県北自動車(株)とともに首都圏企業と沿岸の事業者をつなぐ復興ツーリズムを推進。岩手大学特任准教授として岩手沿岸企業の事業支援や学生の起業家マインド育成事業などを経て、岩手県北自動車(株)から派遣される形で(株)八幡平 DMO の取締役に就任（現職）。調査分析の他、八幡平でのワーケーションや企業研修、二次交通実証運行、スノーリゾート関連、E-BIKE 等を活用したコンテンツ造成を担っている。

分科会：パネリスト



やまざた かずよし
小山田 和義 氏

◆八幡平歴史夢街道の会 会長

八幡平市出身。浅沢神楽保存会会長。昭和40年代、浅沢神楽の唯一の伝承者である齋藤駒吉氏に対し浅沢青年会の一員として伝承活動の継続を依頼。その後旧安代町役場職員の後押しにより浅沢地域住民が昭和50年に設立した浅沢神楽保存会を継承し、地域住民と共に保存活動をしている。平成29年には宮中で開催された新嘗祭（にいなめさい）に出席し、天皇陛下に精粟（ゆいこがね）を献納した。他に農業委員会委員を令和元年より歴任している。

分科会：パネリスト



はたけやま しろし
富山 城司 氏

◆七時雨口マンの会 事務局長

八幡平市出身。長年、地域活動に精力的に取り組んでおり、地元で人気を博す寺田喜劇団では、役者としても大人気である。平成24年から令和3年まで寺田コミュニティセンター長を務め、令和2年には、文部科学大臣表彰の優良公民館表彰を受賞。また、「七時雨口マンの会」の事務局長を長年務めながら、七時雨山の自然、鹿角街道の宿場街、奥州33観音31番札所白坂観音として栄えてきた寺田の歴史を後世に伝えるべく、史跡の保全活動、地元学を語り継ぐ活動をしている。

分科会：パネリスト



しお
階 ケイティ 氏

◆(株)みちのりトラベル東北 インバウンド事業推進室

オーストラリア・ブリスベン出身。日本の文化や伝統芸能に興味を持ち、日本へ留学。その後、日本で就職。結婚を機に2012年に北海道から岩手へ移住。岩手各地に面白い文化や芸能がたくさんあるにも関わらず、外国人観光客に全く知られていないことに対してなんとかしたいという思いで『Iwate the Last Frontier』のプロジェクトに参画している。外国人目線での商品開発、セールス活動と現地の英語対応を担当。北東北におけるアドベンチャーツーリズムの開発に携わっている。

分科会：パネリスト





くぼ りゅうた
久保 竜太 氏





◆縦系横系合同会社 DESTINATION・ コンセプト・デザイナー

釜石市出身。東日本大震災を機に釜石市へのUターンを決意し、2015年に釜石市の復興事業コーディネーターに着任。観光分野で活動し、観光計画策定やDMO法人設立等に携わる。持続可能な観光（サステナブル・ツーリズム）の可能性を追求し、国内で初めて、持続可能な観光の国際基準・認証制度の地域実装を行う。観光庁「日本版持続可能な観光ガイドライン」アドバイザー。『Iwate the Last Frontier』のプロジェクトでは、主に企画構想やコンセプトメイキングを担当。東北のアイデンティティの再興を目指している。

【A：七時雨一里塚～曲田一里塚コース】

〔徒歩距離約8km〕

※  はバス移動、 は徒歩

- 集合 [8:15] 新安比温泉静流閣駐車場
- コース (8:30) 新安比温泉駐車場発 
- (8:45) 七時雨一里塚 
- (10:00) 荒屋一里塚 
- (11:30) 曲田一里塚 
- (11:45) 新安比温泉駐車場着

〔八幡平市 鹿角街道 WEB〕を一部修正 ▶



七時雨一里塚



アケビ収穫



快適な探訪



軽井沢追分碑



軽井沢石地蔵



白山神社の追分碑



荒屋一里塚



街道が秋葉神社参道と交差



曲田一里塚

安比塗

「安比塗」(あっぴぬり)の名前は1980年代に名付けられました。工芸としては新しく感じますが、長い歴史を経て、新たにつけられた名前です。

この歴史の中で重要な役割を果たしているのは「安比川」で、この川沿いは地元で「漆街道」とも呼ばれている様です。塗師が多かった中流域には、鹿角街道継所の荒屋新町があり、4の日に開かれる市(いち)では、漆器だけでなく、道具や木地の売買も行われたといえます。

安比塗と呼ばれる前は、その地名から荒沢漆器がありました。(明治22年荒屋村・浅沢村が合併し荒沢村に、昭和31年荒沢村・田山村が合併し安代町となった。)

かつて、民藝提唱者・柳宗悦は「荒屋新町の漆器」に「邪気のないかたちと絵」と良い評価に「只安物の為、塗りが落ちて堅牢を欠くのは如何にも惜しい」とも指摘。当時の荒沢漆器は、生活雑器で野良仕事の時にも使ったそうです。

当時は、下地に柿渋を塗っていました。柿渋は木地の撥水に役立つが、上塗の漆が剥離することがしばしばあり、柳はこの剥離のことを「堅牢さを欠く」と指摘したと思われます。

この荒沢漆器は、高度経済成長期にプラスチックや樹脂に樹脂塗料などで塗装した器の普及により消滅しましたが、昭和58年設立の安代町漆器センター(現・安代漆工技術研究センター)で新たな塗り方で生まれ変わりました。

新たな漆器は、下地に精製していない生漆を塗り、砥粉を混ぜた錆漆や弁柄を混ぜて中塗りなどをしますが、いずれも漆の塗り重ねです。

安比川の恵みにより生まれた荒沢漆器が新たな塗り方で生まれ変わったのが安比塗です。





(引用・参考:「安比塗漆器工房HP」)



【B: 白坂観音堂跡經由 留の沢一里塚～七時雨一里塚コース】

[徒歩距離約4 km]

※  はバス移動、 は徒歩

- 集合 [8:45] 新安比温泉静流閣駐車場
- コース (9:00) 新安比温泉駐車場発
- (9:40) 白坂観音堂 
- (10:10) 留の沢一里塚 
- (11:00) 車之走峠 
- (12:00) 七時雨一里塚 



「八幡平市 鹿角街道 WEB」を一部修正 ▶



白坂観音堂跡



留の沢一里塚 (東塚)



留の沢一里塚 (西塚)



留の沢一里塚付近追分碑



飛脚福松殉職慰霊碑



助け小屋跡



マンダ並木道



塞の神群



車の走り峠



車の走り峠から眺望



お七地蔵



牧草地を歩く








マダ並木道



七時雨一里塚



【S: 荒沢漆器の展示・講演】

- 集合 [12:30] 新安比温泉静流閣駐車場 ※探訪会 A・B コース終了後
- 内容 (12:40) 新安比温泉駐車場発  (12:45) 五日市コミュニティセンター着  食事 
- (13:15) 講演  (14:15) 五日市コミュニティセンター発 
- (14:30) 新安比温泉駐車場着



会場・パネル展・街道談義の様子



「安比塗と浄法寺塗」の違いは？

浄法寺塗は、天台寺の僧侶が使っていた御山御器（おやまごき）と呼ばれる、小ぶりな汁椀、飯椀、皿の3つ組などの漆器でしたが、高度経済成長に伴うプラスチック製品の普及により荒沢漆器と同様に衰退しました。

しかし、漆の需要はあり、樹液の産地として浄法寺地区は生き残っていました。また、岩手県工業技術センターに専門部署があり、漆器の研修が行われていました。

昭和50年からこの県工業技術センターで学んだ、富士原さんは安代漆器センター（現在・安代漆工技術研究センター）で塗師を育て始め、また岩館さんは昭和54年に県工業技術センターの町田さんと浄法寺漆器の復活を始めました。

二人が県工業技術センターで教わった基礎は、地の粉（珪藻土）を使う蒔地（まきじ）の技法でしたが、仕事をこなしていくうちに、二人は地の粉をやめ、漆を塗り重ねる現在の塗り方に変えていきました。

同じ塗り方を学んで再興を果たした二つの産地は、再出発から40年たち、浄法寺漆器という名前を復活させ、また安比塗として新たに歩み出しました。

安比塗と浄法寺塗の違いは、どちらも仕上げは浄法寺の漆を使う仲ですから安比塗、浄法寺漆器の職人でも、人それぞれ、微妙な個性の違いのみです。

（引用・参考：「安比塗漆器工房」HP）

八幡平市の田山地方には、全国でも例のない絵暦の田山暦（たやまごよみ）がありました。創始は江戸中期の宝暦（1751-64）前後と推定され、幕末まで制作されていました。

田山暦は、東北地方を襲った天明と天保飢饉の中で、農業経営の目安を立てて少しでも農民を救う手立てにと田山の善八が考え出した暦といわれます。文字を読めない人々にも理解し易い様に絵で組み立てた暦で、農具や生活用具、十二支の動物など全て身近なもので表しています。大きさが享和二年暦（1802）では縦24.5cm×横101cmです。伊勢暦を範とした折本で、一折りに一ヶ月をあてています。（閏月があると一折れ分長い。）

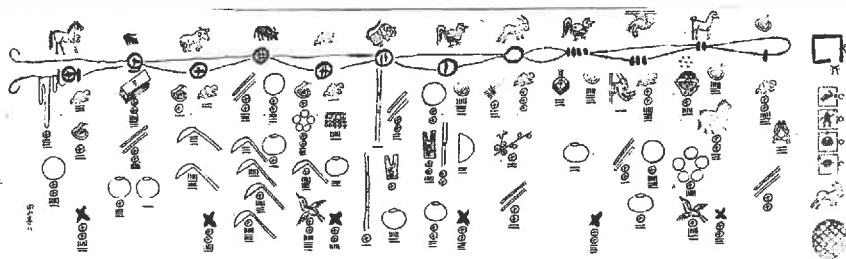
田山暦が使用された地域は田山から鹿角地方と狭い範囲に限られていた様です。

そのため発行数が少なく、年を過ぎれば処分されることなどから、完全な形で残っている田山暦は極めて少なく、所在を確認されているものは、天明三年暦（1783）を含めて6点に過ぎません。

田山では、江戸時代の正徳（1711-16）頃から経文を絵で描くことが行われており、この下地があったからこそ田山暦ができ、地域受け入れられたのであろうと考えられています。

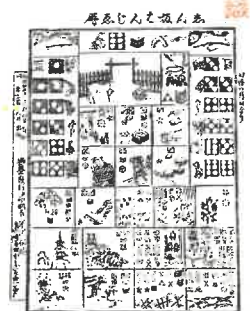
田山暦を記録した旅人は、「菅江真澄」や『東遊記後編』（寛政九年（1797））に図示して世に最初に紹介した「橋南路」がいます。また「松浦武四郎」は、蝦夷地からの帰りの嘉永二年（1849）に田山に滞在して、『鹿角日記』に絵暦や絵経文を詳しく紹介し、「古雅を存して面白し」と書いています。

田山暦



◀ 天明三年暦（1783）田山暦
（岩手県立博物館蔵）

明治26年盛岡暦（国立天文台蔵）▼



盛岡暦

盛岡にも絵暦の「盛岡暦」があり、「田山暦」と併せて「南部暦」と呼ばれています。

現存する最古の盛岡暦は天保四年暦（1833）で、柱暦風の縦長です。天保十六年暦（1845）は半紙

版になっています。現在も盛岡暦は旧暦で毎年発行されており、田山暦とはデザインが違い、洒落やトンチの利いた絵で楽しめる暦です。

（引用・参考：『田山暦・盛岡暦を読む』工藤紘一著）

「とうほく街道会議第18回交流会 八幡平大会実行委員会」事務局

〒028-7397 岩手県八幡平市野駄 21-170 八幡平市文化スポーツ課

TEL: 0195-74-2111 E-mail: bunkasports@city.hachimantai.lg.jp